



英對暖語三編  
上

特  
遠 13  
840  
7



遠 13  
門 840  
號 7  
卷

明治三十六年  
十月十八日  
講求

梅曆拾遺別傳序

梅本ありて或はやぶらぎも本や梅の花をくせに  
初らまきあふ蕉菊の秀句をまきあひて  
此冊子もその梅の一ツ二ツと別がごとく小枝  
一冊の字は假用もふ故う年毎に開く巻  
の花辰己の園より香をすし北方尔美  
枝を継ぐ蒼の花の薫りよくゆり

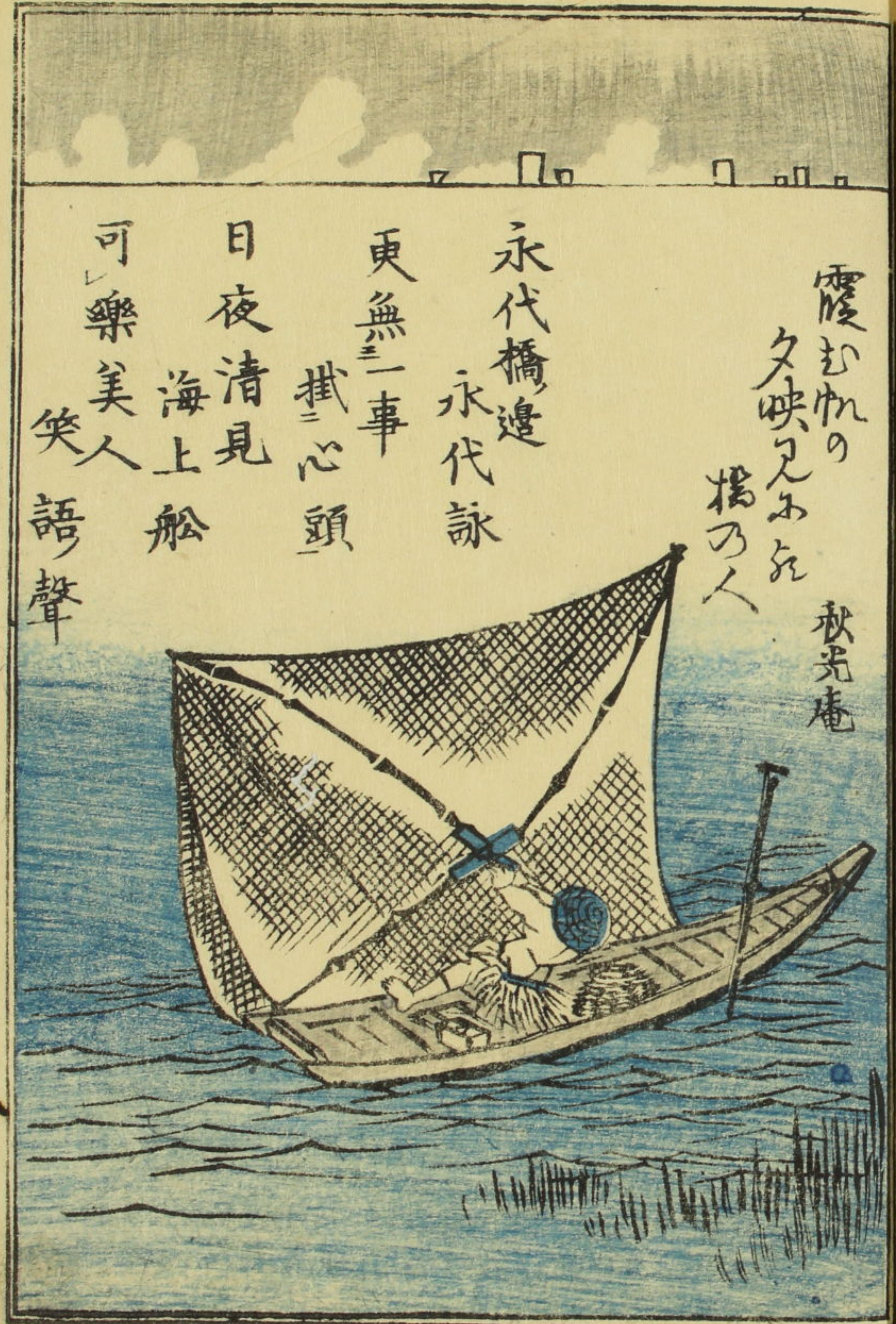
くまぐさのまは厚く今も一株の大樹  
かりしゆ名楠よわび根元でわく程よき  
所へ厚むりの木乃何やら分解ぬ花を  
咲きあそく者まば目よ別一婀娜  
内縁のお憎が傳かた中裏の山雲の折植  
一まんみ花をさしてさありけふか房が  
事な根分の一様回さ庭に植あら

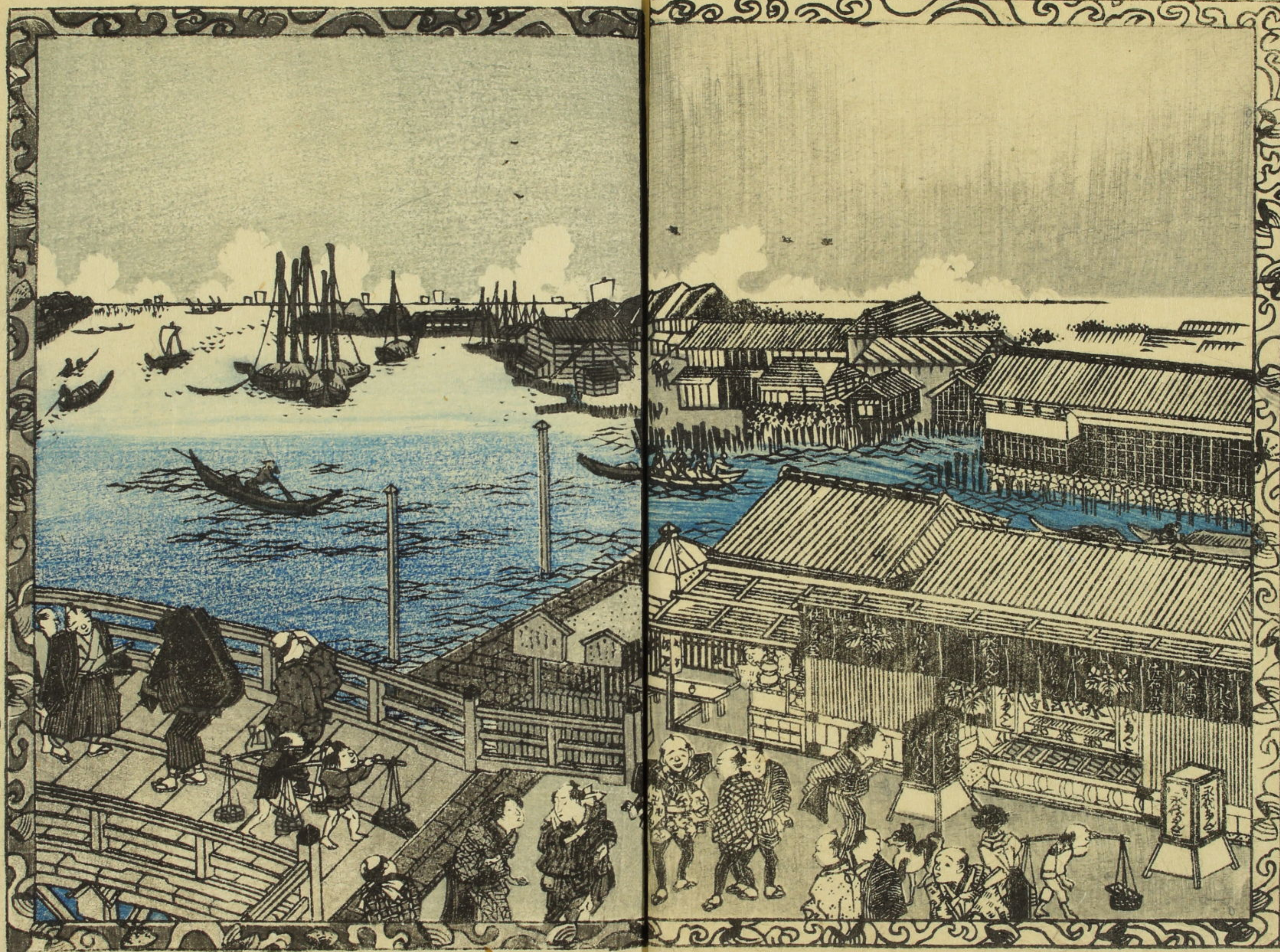
花くま一様別な花めても視俵ぬ花  
よおぶらぬ母津しこ英み對し  
暗さのまの軒目氷の帯の語と様と  
なすまぬせんか題をも其意を  
英對暖語あふいあまきかおまの問女  
を呼出—寛尔の笑顔をさしうまを梅  
が香や菊著の料花をびら書こを

三思中いんちゆうに翻案めがら法冊子ほふよきに勝事くわんじ成なり千里せんりの  
 外わにをとりり即すなは童梅どうばいの智略ちりやくをかりてままく  
 三編さんぺんの高階たうかい見み成なり備そなえたりぬ

東都 人情にんじやう中ちゆう一いつ條じやうの元祖

為永春水誌 





春色惱人  
 眠不得  
 移花影  
 上欄干  
 金爐香爐  
 漏聲殘  
 剪剪輕風  
 陣陣寒  
 春夜作  
 王安石



昨夜夢中見  
 班婕妤  
 賢貞のまが  
 一対の英とるべ



永  
 せすそもく秋の長唄の長く傳へく  
 仲中之所の為譽しつる香く北方の住人も  
 玉の筵さる月影もとびくふ白く雲の袖羅縵の袂  
 引子もさるく見眉もさるく流行子をさるくたそり  
 續小唄  
 永代さるも



大さき

大さき

伊達

お今

あり

花うき

花光巻



春色英對暖語 卷之七 (梅おとく拾遺別傳)

江戸 爲永春水著

第十三章

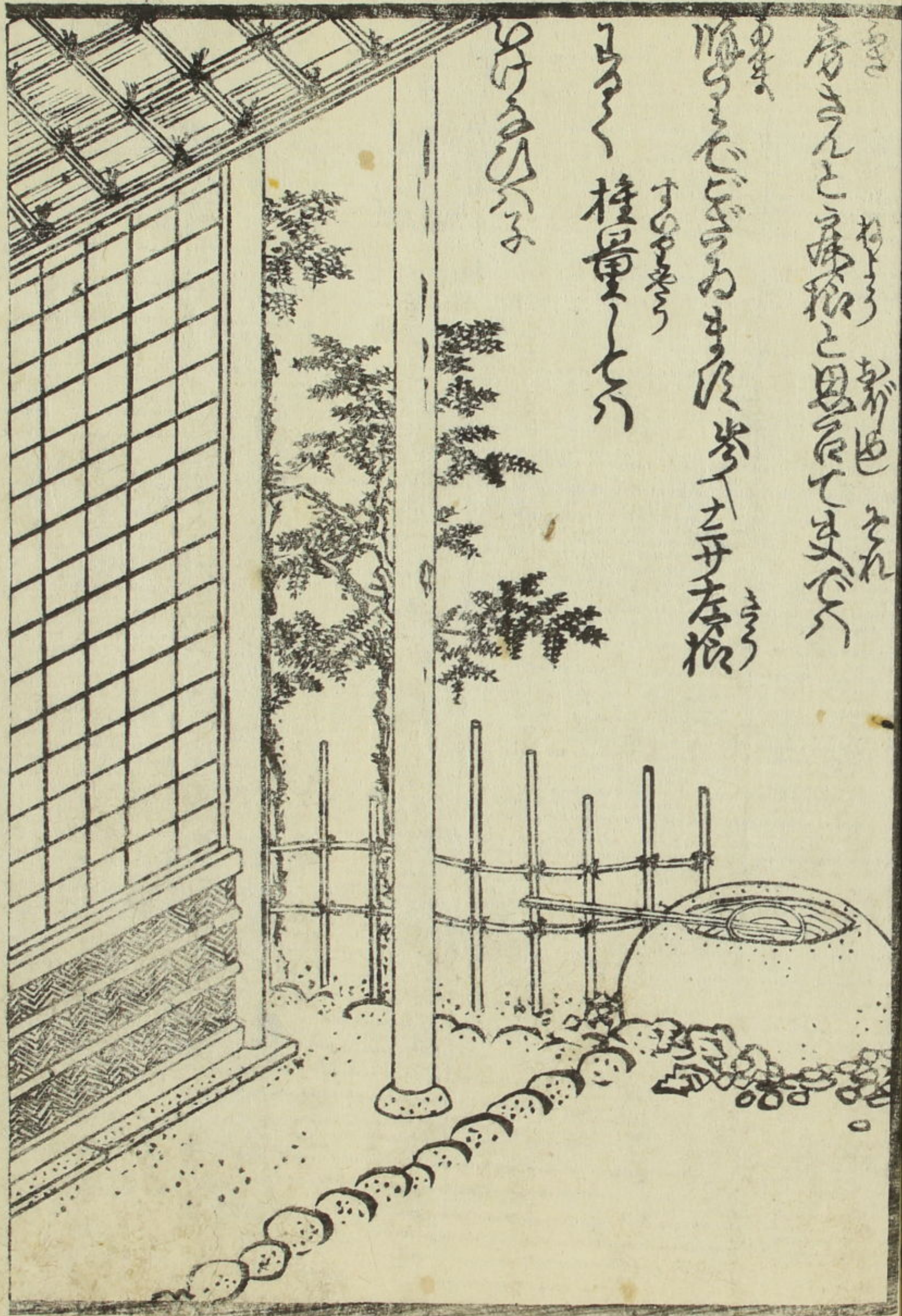
再読巻次布の思ひがけの... 偲ふ因草つ... 花の... 父正庵の... 勤め居る...





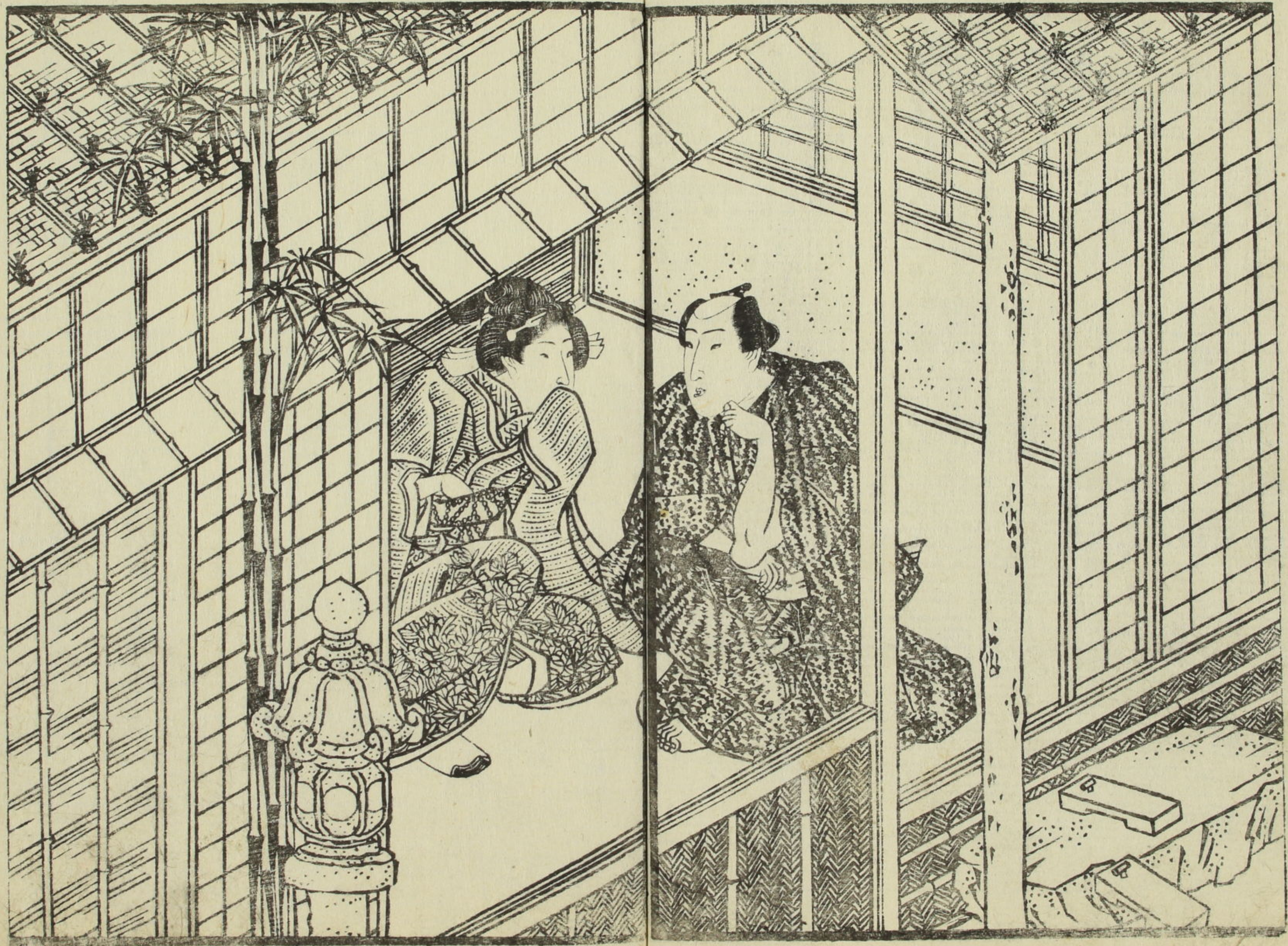






松と梅とを  
 庭に植へて  
 春の光景  
 を見せしむ  
 といふは  
 古の習俗  
 なるべし  
 といふも  
 可なり

庭の四方に松と梅とを植へて  
 春の光景を見せしむといふは  
 古の習俗なるべしといふも可なり  
 といふは古の習俗なるべし  
 といふも可なり  
 といふは古の習俗なるべし  
 といふも可なり  
 といふは古の習俗なるべし  
 といふも可なり  
 といふは古の習俗なるべし  
 といふも可なり  
 といふは古の習俗なるべし  
 といふも可なり

















ろくき鬼どものぶらまいて身を捕へ金櫃を竊へ者ありとて  
ひびき月ふ合せ山と道下り下りぐそれより怪物のいせむらさき  
ゆきべに笑ひまゝ死しとて彼亭のまがはせあるふよりて金櫃  
を自然とさぐるゆへに兄を獲て藤原君よりさぐるおぼえさく  
のぞきし此金櫃のるを撃ち出の小櫃と云ふ号しとてや虚実六  
初るねど兄をさぐるさぐるゆへに藤原君よりさぐるおぼえさく  
殺ひ舟に獲て西軍は身成候しまへおぼの小櫃よゆき  
まへも自然とさぐるゆへに初るゆへに初るゆへに初るゆへに  
書く本づくばらふもはらまゝさぐるおぼえさくおぼえさくおぼえさく  
つこのでばらふおぼえさく 参上まへ本へ入るゆへに松が持てのま  
物の中より抜取て西軍と文章を俗に東軍と小鬼のまがは  
まへに取扱ておぼえさくゆへに本サを歩出の小櫃のゆへに  
陽後集と云ふ書の中にあるまへにサ 本集と云ふゆへに  
すろねもまへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
左衛門守備と云ふもまへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
らるゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ろくき鬼どものぶらまいて身を捕へ金櫃を竊へ者ありとて  
ひびき月ふ合せ山と道下り下りぐそれより怪物のいせむらさき  
ゆきべに笑ひまゝ死しとて彼亭のまがはせあるふよりて金櫃  
を自然とさぐるゆへに兄を獲て藤原君よりさぐるおぼえさく  
のぞきし此金櫃のるを撃ち出の小櫃と云ふ号しとてや虚実六  
初るねど兄をさぐるさぐるゆへに藤原君よりさぐるおぼえさく  
殺ひ舟に獲て西軍は身成候しまへおぼの小櫃よゆき  
まへも自然とさぐるゆへに初るゆへに初るゆへに初るゆへに  
書く本づくばらふもはらまゝさぐるおぼえさくおぼえさくおぼえさく  
つこのでばらふおぼえさく 参上まへ本へ入るゆへに松が持てのま  
物の中より抜取て西軍と文章を俗に東軍と小鬼のまがは  
まへに取扱ておぼえさくゆへに本サを歩出の小櫃のゆへに  
陽後集と云ふ書の中にあるまへにサ 本集と云ふゆへに  
すろねもまへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
左衛門守備と云ふもまへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
らるゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

園宅より後にはまのり一筆松と姉上さんと園がらうのひとと茶を  
あつてつるのあまのなを  
さへつるのあまのなを  
三箇園のよもつるのあまのなを  
さへつるのあまのなを  
園宅より後にはまのり一筆松と姉上さんと園がらうのひとと茶を  
あつてつるのあまのなを  
さへつるのあまのなを  
三箇園のよもつるのあまのなを  
さへつるのあまのなを

一筆松と姉上さんと園がらうのひとと茶を  
あつてつるのあまのなを  
さへつるのあまのなを  
三箇園のよもつるのあまのなを  
さへつるのあまのなを  
園宅より後にはまのり一筆松と姉上さんと園がらうのひとと茶を  
あつてつるのあまのなを  
さへつるのあまのなを  
三箇園のよもつるのあまのなを  
さへつるのあまのなを



暮ぐぐ焼くして義理も世間もあつらふは覺のつづき  
ひとまの紅楓の赤さをまらうとまらうもまき情うとらうりけ  
さきで日中へ他へはうらさくお房の例よりあつても居る  
ひとまの赤さをまらうとまらうもまき情うとらうりけ  
その日もまらうとまらうもまき情うとらうりけ  
他へはうらさくお房の例よりあつても居る  
寝ぐぐ食のせきしき心記りうん方もまらうとらうりけ  
あつらふは覺のつづきお房を御具を調へて  
夜が寝るうらさくお房の例よりあつても居る  
連床とゆふのつちをへはうらさくお房の例よりあつても居る  
おちのヨそまらうとまらうもまき情うとらうりけ  
トかすねくひんまらうとまらうもまき情うとらうりけ  
まらうとまらうもまき情うとらうりけ  
あつらふは覺のつづきお房を御具を調へて  
あつらふは覺のつづきお房を御具を調へて  
あつらふは覺のつづきお房を御具を調へて  
あつらふは覺のつづきお房を御具を調へて  
あつらふは覺のつづきお房を御具を調へて









親跡の満きく存の辰とあると送つてはまづその如  
来の功程を撰みみくかまづは追加の程とす所の  
なり

門人

狂言亭爲永金賀補  
狂花亭爲永春蝶校

あんなやうなものごと  
春色英對暖語卷之七了

